

グリムの灰かぶり

時 田 郁 子

1 はじめに

家庭内で酷い仕打ちを受ける娘が苦勞の末に幸せを掴む話、いわゆるシンデレラ物語が世界各地で語られるのは、古今東西の人々が辛い境遇にある人もいつか報われるという希望を抱いてきたからだろう。日本の『落窪物語』（10世紀末成立）や民話「米福と粟福」もシンデレラ物語に数えられるが、現在シンデレラ物語というと、魔法使いのおばあさん、カボチャの馬車、ガラスの靴などが連想される。これらのモチーフは、シャルル・ペロー（1628-1703）の『過ぎし昔の物語ならびに教訓』（1697）所収の物語「サンドリヨン」とディズニー映画『シンデレラ』（1950）に由来し、意外なことに、グリム童話として知られる『子どもと家庭のための童話集』には出てこない。この童話集は、ヤーコプ・グリム（1785-1863）とヴィルヘルム・グリム（1786-1859）が、法学の師フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニー（1779-1861）経由でアヒム・フォン・アルニム（1781-1831）とクレメンス・ブレンターノ（1778-1842）から受けた依頼に基づき、知り合いの女性たちに語ってもらった話を書き留めたものである。彼らは『子どもと家庭のための童話集』を1812年に出版し、1819年に第二版、1837年に第三版、1840年に第四版、1843年に第五版、1850年に第六版、1857年に第七版と版を重ねるたびに加筆修正をして、童話集全体を拡充した⁽¹⁾。

「灰かぶり」は童話集のなかで最も人気があり、初版以来21番目に置かれているが、初版と第二版との間に内容上大きな変化が見られる。グリム兄弟は「灰かぶり」の物語を複数の話し手から聴き取り、初版に載せたマールブ

(1) Wikisource に掲載されたテキストに基づいて版の比較を行った。 https://de.wikisource.org/wiki/Kinder-_und_Hausm%C3%A4rchen

ルクのエリーザベト施療院にいた老女の話、第二版ではドロテア・フィーマン（1755-1815）の話に差し替えた。兄弟がフィーマンの話を選んだ理由は、彼らの友人ハインリヒ・レオポルト・シュタイン（1782-1836）から口伝で聞いた話と重なる部分があったためとされる⁽²⁾。本稿では、「灰かぶり」の初版と第二版を比較して、第二版での加筆修正箇所を検討し、グリム兄弟独自の灰かぶり像を明らかにしたい。

2 木

「灰かぶり」の物語は、母親が亡くなる場面から始まる。初版（1812）では次のように記される。

昔、お金持ちの男がいて、長い間、妻と仲良く暮らし、一人娘に恵まれました。妻は病気になり、最期が近づくと、娘を呼んで言いました。「かわいい子、私はお前を置いていかなくはなりません。けれども空の上にて、お前を見えています。私のお墓に小さい木を植えてね。お前が何か欲しいときには木を揺すってごらん、そうすればそれを手に入れられます。他にも何か困ったときには私がお前に助け船を出してあげます。どうか敬虔でよい子でいてね。」そう言って目を閉じて亡くなりました。娘は泣いて、お墓に小さい木を植えましたが、水を持ってきて注ぐ必要はありませんでした。娘の涙で充分だったからです。

(2) Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen herausgegeben von Heinz Rölleke. Band 3. Stuttgart. 2010. Nachweis zu KHM 1-200. S. 467.

母親は臨終に際し、娘を気遣い、供養の仕方を伝授する。娘がなすべきは母親の「お墓」に「小さい木」を植えることであり、その後木を大事に育てればよい。それが「敬虔でよい子で」いることなのである。ヨーロッパでは長らく土葬が一般的であったため、墓の上に植えられた木は遺体を栄養分にするだろうと想像され、さらに娘の涙が水の代わりとなれば、この木は母親と娘から成り立っていると言えよう。母親は死後も、木を媒介にして娘を助けるつもりなのである。その三年後、父親が再婚し、娘は劣悪な境遇に追いやられて「灰かぶり」と呼ばれる。

第二版では植樹の件は省かれ、母親の死の一年後に父親が再婚し、娘は「灰かぶり」と呼ばれる。そして初版にはないエピソードが語られる。

あるとき父が市場に行くことになり、二人の継娘に、何をお土産に買ってほしいか尋ねました。一人目はきれいなドレスを、二人目は真珠と宝石を、と言いました。「それで、灰かぶり、お前は何がほしい？」と父は言いました。「お父さん、帰り道で最初にお父さんの帽子に当たった枝を」と灰かぶりは答えました。彼は二人の継娘に美しいドレスと真珠と宝石を買いました。帰り道、彼が緑の茂みを馬で通っていくと、ハシバミの枝が引っ掛かり彼の帽子を落としました。そこで彼は枝を折りました。家に着くと、彼は継娘たちに望みの品を与え、灰かぶりにハシバミの枝を与えました。灰かぶりは受け取ると、それを持って母の墓へ行き、墓の上に植えて、さめざめと涙を流したので、その涙は枝に注がれました。こうして枝はどんどん成長して、美しい木になりました。灰かぶりは毎日三回木のところへ行き、泣いて、祈りました。その度に白い鳥が木の上にやってきて、彼女の望みの品をくれるのでした。

第二版の灰かぶりは「帰り道で最初にお父さんの帽子に当たった枝」を土産に望む。継姉たちが高価な商品を欲するのに対し、灰かぶりの望みの品は無料でどこにでもあるものだが、奇妙にも彼女は父親の帽子が枝に当たると見越していた。もちろん森の中を馬で通り抜ける人の帽子が枝に当たって落ちるのはありえないが、灰かぶりの予言通りになるのは不思議だ。そして灰かぶりは父親から受け取ったハシバミの枝を母親の墓に植えて、大切に育てていく。枝を土に埋める行為は、ドイツの慣習法において遺産の譲渡と相続の完了を意味するため、このとき灰かぶりは母親の婚資（家財道具、衣服、装飾品、化粧品など）を相続したと言える⁽³⁾。さらに死者の魂が鳩など白い鳥に化身するとの言い伝えを踏まえると⁽⁴⁾、彼女が木の世話をする度にやってくる白い鳥は母親の魂の化身であり、鳥から渡される品物は母親の遺産に他ならないと判明する。

娘が父親から土産にもらった枝を植えて育てるエピソードは、グリム兄弟が参照したジャンバッティスタ・バジール（1573?-1632）の『ペンタメローネ（五日物語）』（1634-36）所収の物語「灰かぶり猫」でも語られるため、その内容を見ておこう。ナポリの大公は妻を亡くして再婚する。彼の一人娘ゼゾッラは継母に苛められ、自分を可愛がってくれる編み物の先生を慕って、父親と先生との結婚を願う。ゼゾッラは先生の指南通りに継母を殺し、先生と大公の結婚のお膳立てをする。結婚式の日、鳩がゼゾッラの前に現れて「何か願いごとがあったら、サルディーニャ島の妖精鳩にそう言伝えてごら

(3) 野口芳子「『シンデレラ』の固定観念を覆す——ジェンダー学的観点からのグリム童話解釈——」、『武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）』58号、2010、4-5ページ参照。

(4) 「死者の霊はしばしば白い鳩として生者に姿を見せる。」Vgl. Hrsg. von Hanns Bächtold-Stäubli unter Mitwirkung von Eduard Hoffmann-Krayer: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Augsburg 2000. Band8. Taubeの項、S. 696f.

ん。願いがかないます。』⁽⁵⁾ と言う。新しい継母はすぐにゼゾッラを邪険に扱い、灰かぶり猫と呼ぶ。ある日大公がサルデーニャ島に行くことになり、土産に何が欲しいか娘に尋ねると、彼女は「あたくしなにもいりませんが、ただ、妖精の鳩にあたくしのことを伝えて、何かいただけるようおっしゃってくださいな。これをお忘れになるとにっちもさっちもいなくなります。自業自得という言葉をお心にお留めおきくださいね」⁽⁶⁾ と答える。所用を済ませた大公は娘の頼みを忘れて船に乗り込むが、船は港から出られない。すると、船長の夢枕に妖精が立ち、大公に娘との約束を思い出させるよう告げる。船長の話聞いた大公は早速妖精を訪ねて、「金色のナツメの木とシャベルと缶に絹のハンカチ」を受け取る。「ナツメの木は植えるため、缶とハンカチは木の世話をするためのものです。」⁽⁷⁾ ゼゾッラは妖精からの贈り物を喜んで、植木鉢にナツメの木を植えて世話を始める。四日後、妖精が木から出てきてゼゾッラに望みを尋ね、彼女は姉たちに知られずに時々外へ行きたいと言い、妖精から呪文を教わり、いつでもドレスを入手できることになる。

「灰かぶり猫」では鳩が妖精であり、サルデーニャ島に住むと記される。サルデーニャ島は古くから文化の栄える地中海の島で、妖精がいる場所、すなわち異界と信じられてきた。サルデーニャ島からナポリへ海を渡って来る鳩を見て、ナポリの人々は島の妖精が鳩の姿を取っていると考えたのだろう。大公は政務でサルデーニャ島に行ったのだが、鳩と妖精とを同一視するゼゾッラは、父親の本来の用件は妖精訪問であると見なしている。彼女にとって妖精の鳩は亡くなった母親に他ならず、大公が妖精訪問を忘れて帰路の船に乗

(5) ジャンバッティスタ・バジレ (杉山洋子・三宅忠明訳) 『ペンタメローネ [五日物語]』、大修館書店、1995、65 ページ。

(6) 上掲書、66 ページ。

(7) 同上。

り込んだのは、二度の再婚を経て亡き妻を忘却していたためであり、彼はこの事実に気付いて狼狽する。それでも大公は娘の依頼通り妖精に会いに行つて、贈り物を娘に持ち帰り、任務を果たした。その後「金色のナツメの木」は驚異的な速度で成長し、妖精はこの木からゼゾラの前に現れる。異界から人間界にもたらされた木は、妖精が異界から人間界へやって来る扉なのである。

「灰かぶり猫」の大公が妖精から「金色のナツメの木」の栽培セットを貰ってきたのに対し、「灰かぶり」の父親は娘の頼みを忘れないものの、通り道にあった枝を折るだけで、それほど労力を払っていない。それにしても、なぜ枝が土産なのだろうか。この疑問を解く鍵はグリム兄弟が参照した「ラスコバルとミリフカ ポヘミアの妖精時代の物語」にあると考えられるため⁽⁸⁾、この物語の内容を押さえておこう。それは『ボヘミアの古い時代の伝説』（1808）に収められた五編のうち最初の物語で、初めから三分の一の分量がシンデレラ物語に相当する⁽⁹⁾。ドイツに商用で出掛ける父親が娘のミリフカにお土産に何が欲しいか尋ねると、彼女は「お父さんの帽子に当たったもの」⁽¹⁰⁾と言う。帰路に就いた父親は帽子に落ちてきた「ハシバミの実」⁽¹¹⁾を土産に持ち帰る。ミリフカは喜び、この実をいつも持ち歩くが、井戸で水を汲んだ際に落としてしまう。悲しむ彼女の前に見知らぬ男が現れて、彼女を憐れみ「金の杖」をくれる。「さあ私からこの金の杖を受け取りなさい。これで井戸に触れると、井戸が開き、君は井戸の内部に入ることができる。これ以上は何も言わないでおこう。君はここで何かを見つ

(8) Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. S. 467.

(9) Sagen der böhmischen Vorzeit aus einigen Gegenden alter Schlösser und Dörfer. Prag 1808.

(10) A.a.O., S. 3

(11) A.a.O., S. 4.

けて喜び驚くよ。』⁽¹²⁾ 男はこう言い、姿を消した。彼女が杖で井戸に触れると階段が現れ、井戸の底へ降りた彼女は、そこが数多くのドレスが掛かっている豪華な部屋、すなわちクローゼットであると知る。ここで彼女はいつでも素敵なお洋服を纏うことができる。

ミリフカの父親が持ち帰ったのは「ハシバミの実」であり、彼女は井戸に「ハシバミの実」を落とした代わりに「金の杖」を手に入れた。井戸で出会った見知らぬ男は「灰かぶり猫」の妖精と同じ援助者であり、井戸は人間界と異界とを繋ぐ扉に相当する。グリム兄弟がこの物語を知っていた事実を踏まえると、第二版の灰かぶりが「帰り道で最初にお父さんの帽子に当たった枝」を土産に指定するのは、「ハシバミの実」から「金の杖」への変換過程を省いただけと言えよう。事実、「ハシバミの枝」が急速に成長して灰かぶりに衣服を提供するのは、「灰かぶり猫」の「金色のナツメの木」と「ラスコバルとミリフカ」の井戸の底のクローゼットと同じであり、これら三つは同じ機能を持っている。ハシバミとナツメという具合に木の種類が異なるのは、物語が語られる地域の気候条件に依るためであり、ハシバミはドイツ語圏に自生し、その枝は古くから地下の水脈や鉱脈を探し当てる占い棒として用いられ、「金の枝」と呼ばれた⁽¹³⁾。ここで「金の枝」のモチーフを遡ると、ウェルギリウスの『アエネーイス』第六歌に登場する金の枝に行き着くため、このエピソードも見ておこう。アエネーイスはトロヤ戦争で亡くなった父親に会うため冥界に行きたいと巫女に頼み、巫女はその前にアエネーイスの友の遺体を弔うべく、金の枝を折るよう告げる。彼は弔いの準備にかかり、二羽の鳩に導かれて金の枝を見つけ、それを巫女に渡して、巫女に続いて洞窟に入り、

(12) A.a.O., S. 6.

(13) Jacob Grimm: Deutsche Mythologie. Erster Band. Göttingen 1854. S. 546.

冥界の父親に会い、子孫が繁栄する未来を教わる⁽¹⁴⁾。ここでの金の枝は冥界に入るための鍵である⁽¹⁵⁾。灰かぶりとゼゾラ、ミリフカは父親から土産として渡されたアイテムを用いて異界に到達したが、『アエネーイス』の挿話はこの異界が冥界であると示している。灰かぶりが母親の供養を続け、アエネーイスが亡くなった友人や父親を弔うように、死者を大切にする者だけが異界から援助を受けられるという構図が金の枝に纏わるこれらの物語に共通することは明らかである⁽¹⁶⁾。

3 豆の試練とドレスの入手

「灰かぶり」の物語では、その後、王様が息子の花嫁を見つけるために三日間パーティーを開催する。初版（1812）では、継姉たちは灰かぶりに身支度を手伝わせた後、一緒に行きたいかどうか尋ねて、灰かぶりがドレスがない

(14) ウェルギリウス（岡道男・高橋宏幸訳）『アエネーイス』京都大学学術出版会、2017、242-295 ページ参照。「黄金の枝」に関する記述は、136-148 行（250 ページ）と 190-211 行（253-254 ページ）にある。

(15) 「金の枝」はフレイザーの『金枝篇』の主題でもある。ローマ近郊のネミ湖周辺の森には、古代のディアナ信仰が根付いており、そこに生える一本の樹の枝を折り取れば、「森の王」と呼ばれる祭司と戦う機会が与えられる。挑戦者は祭司に勝利すると「森の王」になる。この図式はヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』（1200-1210 頃）第 12 巻において騎士ガーヴァーンが木の守護者グラモフランツ王と戦い、枝を折り取って、乙女オルゲルゼと結婚するエピソードに共通する。

(16) 死者を大切にすることにより亡き親から援助を得る図式はロシア民話にも見られる。アフナーシエフの『ロシア民話』179・180 番の物語「葦毛の駿馬」では、三人兄弟の父親が亡くなる際に、三日間自分の墓に来て泊まるように遺言し、三男のみが三日間墓に通って葦毛の駿馬を報酬として貰い、この馬の働きにより王女との結婚を果たす。アフナーシエフ（金本源之助訳）『ロシアの民話 2』、群像社、2010、127-139 ページ。

から行けないと答えると、豆を選び分けるよう命じ、灰の中に豆をおちまけて出掛けていく。

灰かぶりは「ああ」と言って溜息をつきました。「私は真夜中までこれを選び分けなくてはならなくて、目を閉じててもいけないのね。あの人たちがこんなに私を苦しめても、お母様さえわかったださればいいのだけれど！」彼女は竈の前の灰に膝をつき、選び分けようとしていました。そのとき白い鳩が窓から入ってきて、竈の中のレンズ豆の横にとまりました。鳩たちは頭をかしげて言いました。「灰かぶり、レンズ豆を選び分けるお手伝いをしようか?」「ええ」と灰かぶりは答えました。

「悪い豆はお口の中に、
よい豆は鍋の中に。」

そしてつん、つん! つん、つん! 鳩たちはつまみはじめ、悪い豆を食べてよい豆を残しました。十五分もすると悪い豆はなくなり、レンズ豆だけになったので、灰かぶりはそれらを全部鍋に入れることができました。

灰かぶりがパーティーへの参加を諦めているにもかかわらず、継姉たちは灰の中からよい豆を選び分けよと命じて嫌がらせをし、灰かぶりは「お母様さえわかったださればいいのだけれど!」と亡き母親を心の支えにして豆の選び分けを始めようとする。そこに白い鳩がやってきて手伝いを申し出て、仲間の鳩も集まり、十五分で仕事を片付ける。そして鳩たちが「灰かぶり、君の姉さんたちが王子様と踊るのを見たければ、鳩小屋に登ってごらん。」と勧めたため、灰かぶりは鳩小屋の上に立って遠くの会場を眺める。

それに対し、第二版（1819）の灰かぶりは継姉たちの身支度を手伝い、

パーティーに行きたい気持ちを抑えられず、継母に許可を求める。灰かぶりはドレスもなくダンスもできないからと言って継母は許可しないが、灰かぶりが懇願すると、二時間以内に豆を選び分けられたら同行してもよいと言って、灰に豆をおちまける。灰かぶりは鳩に手伝いを頼むことにする。

娘は裏口から庭に出ていき、声をかけました。「飼いバトさん、コキジバトさん、空の小鳥さんたち、ここに来て私が拾うのを手伝ってちょうだい。

よい豆はお鍋に

悪い豆はお口に。』

すると二羽の白い鳩が台所の窓から入り、コキジバトが、そして空の下の小鳥たちが続いて羽音を立てて集まり、灰のあたりに舞い降りました。ハトたちは頭を上下に動かして、ついばみ始めました。つん、つん、つん、つん。すると他の鳥たちも始めました。つん、つん、つん、つん。よい豆はすべて鉢の中に入り分けられました。一時間も経たないうちに、すべてを終えて、皆飛び立ちました。

灰かぶりが鳩に呼びかけて、「私が拾うのを手伝ってちょうだい」と願いを述べる点に注目しよう。ルース・ボティックハイマーによると、伝統的なゲルマンの型の呪文は、1) 念ずる対象である神または自然の力の名を呼ぶ、2) 呼び出される力の効き目を立証する過去のわざを述べる、3) 命令形で願いごとをする、という三つの部分から成る。グリム童話では一般に2) の部分がなく、主人公たちは念ずる対象の名を呼び、命令形で願い事をする⁽¹⁷⁾。灰か

(17) ルース・ボティックハイマー（鈴木晶、広川郁子、田中京子、横山絹子訳）『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』紀伊國屋書店、1990、S. 84f.

ぶりが「飼いバトさん、コキジバトさん、空の小鳥さんたち」と呼びかけた上で、「手伝ってちょうだい」と願いごとをするため、彼女の言葉は呪文と見なすことができるのである。事実、鳩たちは灰かぶりの言葉に従う。初版の鳩が灰かぶりと対等に会話を交わすのに対し、第二版の鳩は黙って命令に従っており、灰かぶりと鳩との関係は初版から第二版にかけて大きく変化している。また、豆の試練を課す人物は継姉から継母へ、選り分け作業は単なる嫌がらせから試練へと変わり、作業にかかる時間は十五分から一時間へと四倍に増え、試練の過酷さが強調される。

灰かぶりは仕事を片付けると、意気揚々と継母に豆を持って行くが、継母は再度豆をぶちまける。その後灰かぶりが二度目の試練をこなしても、継母は彼女のパーティー参加を認めない。それでも灰かぶりはパーティーに行くべく奮闘する。

誰も家にいなくなると、灰かぶりはハシバミの木の下にある母の墓に行って声をかけました。

「木よ、揺れて、振って、

私に金と銀を落としてちょうだい！」

すると鳥が娘に金と銀のドレス、それに絹と銀で刺繍された靴を投げ落としました。娘はドレスを着て、結婚式へ向かいました。

灰かぶりは「木よ」と呼びかけ、「揺れて、振って、私に金と銀を落としてちょうだい」と命令形で願いを述べて、呪文を唱える。すると鳥が「金と銀のドレス」と「絹と銀で刺繍された靴」を落とす。前章で考察したように、木は亡き母親の遺産を収めるクローゼットの役割を担っており、母親の魂の

化身である鳥が灰かぶりに衣服を渡してくれる。こうして灰かぶりがパーティーに参加する準備は整った。

4 王子と灰かぶりの父親

灰かぶりがパーティーに参加する回数は初版と第二版では異なり、初版の灰かぶりは二日目にはじめてパーティーに行くため、計二回、第二版では初日から計三回パーティーに参加する。

初版で灰かぶりがはじめてパーティーに参加する様を見よう。パーティーの二日目、前日同様、白い鳩が豆の選り分けを申し出て、灰かぶりにパーティーに行きたいか尋ねる。彼女が行きたいと答えると、鳩は木のところでドレスを入手できると教え、灰かぶりは銀のドレスと靴を身につけ馬車で会場に乗り付ける。王子と踊った後、彼女は十二時前に辞去して、木にドレスを返却する。灰かぶりが馬車に乗って会場に乗り付けること、十二時前に帰宅しなくてはならないことは、ペローの「サンドリヨン」のモチーフをそのまま受け継いでいる。

第二版の灰かぶりは初日から三日連続でパーティーに参加する。初日に彼女は徒歩で会場に向かい、辞去する際には王子を振り切って逃げ出し、自宅の庭にある鳩小屋に飛び込む。王子はその場で待ち、帰宅した灰かぶりの父親に事情を説明する。父親は「灰かぶりかもしれない」と考えるが、王子に協力して鳩小屋を斧で壊す。その間、灰かぶりは鳩小屋を通してハシバミの木の下に行き、ドレスを返却して台所に戻っていたため、壊れた鳩小屋からは何も見つからない。二日目も灰かぶりは豪華なドレスを着てパーティーへ行き、王子を振り切って帰宅、今度は梨の木に飛び乗って、ハシバミの木の下

下に行き、ドレスを返却する。王子と灰かぶりの父親は梨の木を切り倒すが、誰も見つけられない。第二版で着目すべきは王子と灰かぶりの父親の共同作業である。彼らは初日に鳩小屋⁽¹⁸⁾を斧で割り、二日目には梨の木を斧で切り倒す。彼らは鳩小屋の中や梨



の木の上面に目当ての女性がいると考えているにもかかわらず、なぜそれらを破壊するのだろうか。

ヨーロッパにおいて鳩は一般に愛や平和を象徴し、「灰かぶり」では亡き母親の化身とされる一方、実生活で食されてきた。つまり鳩小屋は食用の鳩を飼育する場所である。初版の鳩小屋は灰かぶりがパーティーを遠望する台であり、第二版以降のそれは鳩たちの基地にして、パーティーから戻った灰かぶりが立ち寄る彼女自身の拠点でもある。鳩小屋が壊された後、彼女の拠点は梨の木に移る。梨はヨーロッパ文化においてリングと同様、豊穡を象徴し、リングが男性原理を表すのに対して、女性原理を表す梨の木は結婚や子どもに関連づけられる⁽¹⁹⁾。灰かぶりは実をたくさんつけた梨の木を登っていき、その様は第四版（1840）以降「リスのよう」と描写され、彼女の軽快な身のこなしは敏捷な動物の動きを連想させる。王子と父親にとって鳩小屋に飛び

(18) 17世紀オランダの鳩小屋の図版。 [https://de.wikipedia.org/wiki/Taubenhaus#/media/Datei:Fernes_\(Abraham_Bloemaert,_Frederik_Bloemaert\).jpg](https://de.wikipedia.org/wiki/Taubenhaus#/media/Datei:Fernes_(Abraham_Bloemaert,_Frederik_Bloemaert).jpg)

(19) Vgl. Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Band1. Birnbaum の項, S. 1339-1342.

込んだり梨の木に登る存在は動物に等しく、動物に擬えられる存在を捕らえるには、その拠点を壊しても差し支えないのである。

パーティーの三日目、王子は灰かぶりの正体を知るべく、パーティー会場の階段にタール (Pech) を塗らせる。王子のこの策略はグリム兄弟の創作である。というのも、「灰かぶり猫」では王子の召使いがゼゾッラの馬車を執拗に追い回した結果、彼女が片方の木履を落としており、「サンドリヨン」では十二時の鐘を聞いて焦ったサンドリヨンがパーティー会場を出たときにガラスの靴を落とすだけからである。灰かぶりは王子の目論見通り、階段のタールに「金の靴」をひっかける。「金の靴」は初版では片方落としたと記されるだけだが、第二版以降は「左の靴」との限定が加わる。野口氏によると、グリム兄弟は、左の靴を脱げる女性は出産できるという言い伝えやケルト文化において金箔をはった靴が王権を表すことを知っていたため⁽²⁰⁾、灰かぶりが落とした金の左靴は、富と権力と出産能力の証になる。それにしても、灰かぶりの手掛かりを得るべくタールを塗って靴を入手する手法は強引だ。第二版以降の王子が灰かぶりの拠点が鳩小屋と梨の木であると知っていたこと、タールが鳥を捕まえる鳥もちに使われること⁽²¹⁾ から、王子が灰かぶりを鳥に等しい存在と見なしていたと考えよう。すなわち、灰かぶりを白鳥乙女に重ねていたと。白鳥乙女は民間伝承において人間や鳥の姿を取る乙女を指し、池や湖で水浴びをするときに人間の姿を取る。人間男性が白鳥乙女たちの水浴びを眺めて、そのうちの一人の衣服を隠すと、衣服を取り上げられた乙女は仲間と共に鳥になって飛び立つことができずこの男性と結婚する。こうし

(20) 野口：上掲論文、5-6 ページ参照。

(21) Jacob Grimm und Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. Siebenter Band. 13. Leipzig 1889, S.1516f. Pech の項参照。

た話は世界各地で語られ、日本の民話「鶴の恩返し」もその類話である。これを念頭におくと、灰かぶりが鳩と会話を交わし鳩小屋に出入りするのには彼女自身が鳩の仲間だからであり、小屋が壊された後に梨の木を登るのも鳥だからと考えられる。とはいえ、第四版以降、彼女が「リス」に喩えられるため白鳥乙女のイメージは薄まるのだが。王子が灰かぶりの衣服の一部である靴を無理やり入手するのは、白鳥乙女の衣服を隠すことと同義である。ではなぜ灰かぶりは白鳥乙女の性質を帯びているのだろうか。

灰かぶりは父親の再婚後、台所に追いやられ竈の隣で寝ようになり、いつも薄汚れた身なりをしていた。だが竈周辺で生活することは必ずしも否定的な意味を持つわけではない。ロシア民話では、ベチカの上で寝そべる怠け者がいったん家の外に出ると英雄的行為を行うこともあるほどである⁽²²⁾。寒冷な気候のロシアでは竈を中心にして建物が作られ、竈の周辺が居住空間になっており、その構造全体がベチカと呼ばれる。怠け者の息子は家族に呆れられながらも甘やかされ、竈の上部に備えられた寝台に寝そべる特権を享受し、力を蓄えている。他方、灰かぶりは家族から過酷な扱いを受けるが、やはり竈の周辺にいることによって密かに力を蓄えていると考えられるのである。ヤーコブ・グリムは『ドイツ神話学』の中で、「不幸な者、追放された者はしばしば竈へ行き、苦境を訴えたり、世間に打ち明けていない秘密を暴露する。普段なら馬鹿げたように見えることも明らかになる。これは太古の聖火の儀式の名残で、誤解されたしきたりと呪文である。」⁽²³⁾と述べて、竈の前

(22) アファナーシエフの『ロシア民話』135番の物語「灰かむりのイワン」は12年間ベチカの上で寝そべっていた末息子が一念発起して起き上がり大蛇退治をする。アファナーシエフ（金本源之助訳）『ロシアの民話 1』群像社、2009、259-264ページ。

(23) Grimm: Deutsche Mythologie. S. 595f.

にいる灰かぶりを聖火の儀式に関連づける。そもそも竈は神聖な場所であり、古代ギリシアやローマでは竈の女神が崇められていた。クーランジュによると、聖火の宗教は太古に始まり、アーリア民族が各地へ分散し、それぞれの神を持った後も、信仰の第一を占めていた⁽²⁴⁾。ギリシア人やローマ人たちは竈の火が消えないよう心を配り、「人々は、竈のうちに、人間生活を支持する情け深い神、人間に身を養ふべき賜物を恵む富める神、家と家とを守護する力、強い神を認めてゐた。そして、もし危険に迫られると、この竈の傍に難を避けた。」⁽²⁵⁾ この観点から、灰かぶりは「難を避け」るため竈の傍にいたとも捉えうる。竈は擬人化され、ギリシアでは女神ヘスチア、ローマでは女神ウェスタと呼ばれ、「ヴェスタの神は精神的秩序であつた。ヴェスタは、あたかも靈魂が我々の諸器官に規範を與えるやうに、世界の種々の動きを規正する一種の宇宙靈魂のやうに想像されてゐたのである。」⁽²⁶⁾ こうした文脈を踏まえて、灰かぶりが家事を担われ竈の周辺で生活するうちに、ウェスタ女神の神官と化し、「精神的秩序」や「宇宙靈魂」と交信して、呪術を身につけていったと考えたい。初版の灰かぶりが亡き母親の援助を受ける受動的存在であったのに対し、第二版以降の灰かぶりは積極的に己の道を切り開く。彼女が商用で出掛ける父親に枝を求めたのも、鳥たちを総動員して豆の試練をこなしたのも、呪文を唱えてパーティー用のドレスを入手したのも、ウェスタ女神の神官だったからできたのであり、彼女が鳥の姿に変身する術を心得ていたことは想像に難くない。

そもそも灰かぶりがこのような境遇になったのは父親のせいである。彼女

(24) フェステル・ド・クーランジュ（田辺貞之助訳）『古代都市－ギリシア・ローマに於ける宗教・法律・制度の研究』白水社、1944、77ページ参照。

(25) クーランジュ：上掲書、73ページ。

(26) クーランジュ：上掲書、80ページ。

の父親は再婚後、苛められている娘を気に掛けないばかりか、「灰かぶり」という蔑称で娘に呼びかけさえする。野口氏によると、近代的な家族が愛情で結ばれた情緒的共同体であるのに対し、中近世の家族は経済的機構であり、商人である父親は再婚相手の財産を何よりも大事にするものであり、前妻との娘である灰かぶりを邪険に扱うのは珍しくはない⁽²⁷⁾。そして父親はパーティー会場で人目を惹く美女が自分の娘ではないかと思ひ至ると、一転して王子に協力する。娘と王子との結婚は商人である父親にとって利益になるからである。そのためには、白鳥乙女と化した娘を人間に戻さなくてはならない。灰かぶりの父親と王子の暴力的振る舞いはこの観点から理解することができる。

5 継姉たちの受難

金の靴を手に入れた王子は、初版では若い娘全員を対象にして靴合わせを行うが、第二版以降はまっすぐ灰かぶりの家にやってくる。ドイツの古い慣習では、婚約に際し花婿が花嫁に靴を持ってきて、靴が合えば結婚が成立するため⁽²⁸⁾、王子はこの慣習に則って灰かぶりの家にやってきたと言える。一人目の継姉はかかとを切り落として靴に足を押し込む。王子は初版では彼女と共に馬車に乗り、第二版以降は彼女を自分の馬に乗せて出発する。初版では「門」のところで、第二版以降では「墓の上に生えたハシバミの木」のところで、木に止まっている二羽の鳩が、「振り返ってごらん！振り返ってごらん！靴の中は血でいっぱい、靴が小さすぎるんだ、本当の花嫁はまだ家にいる！」と歌い、王子に間違いを指摘する。王子は偽の花嫁の靴が血まみれに

(27) 野口：上掲論文、8-9ページ参照。

(28) Vgl. Jacob Grimm: Deutsche Rechtsaltertümer. Göttingen 1828. S. 155.

なっているのを確認して引き返す。次いで二番目の継姉が靴合わせを行い、つま先を切り落として足を靴に押し込むが、同じ結果に終わる。王子が再度戻って来ると、初版では継母が灰かぶりを出すのを渋り、第二版以降では継母は渋るものの、父親が登場して「亡くなった妻との間にまだ小さくて汚い灰かぶりがおりますが、あの子は花嫁になれそうにありません。」と答えている。そして灰かぶりは王子の要求に従って靴合わせを行い、彼女こそ本物の花嫁だと明らかになる。王子と灰かぶりが家を出発すると、初版では鳩たちが「振り返ってごらん！振り返ってごらん！靴には血がついていない、靴は小さすぎないよ、本物の花嫁を、彼は連れて帰るんだ！」と歌い、物語は終わる。

第二版以降ではここにもう一段落付け足される。

王の息子との結婚式が行われたとき、腹黒い姉たちがやってきて、取り入り幸せに与ろうとしました。灰かぶりが教会へ向かうとき、長姉が右側を、次姉が左側を歩き、鳩がそれぞれから片目をつまみ出しました。その後、彼女が出てくるときに、長姉が左側を、次姉が右側を歩くと、鳩がそれぞれから別の片目をつまみ出しました。こうして彼女たちは悪事と欺瞞のため生涯盲目になることで罰せられたのでした。

グリム兄弟は第二版以降、継姉たちの処罰を付け加えた。この場面は類話にはない。「灰かぶり猫」では「六人の姉妹は羨望のあまり土気色になって、心臓が破裂しそうでもうがまんできなくなってしまい、そっと家に這い戻りました。くやしくてたまらないけれども、運命の星にさからう者は狂人なりという教訓を母親に伝えたのでございました。」⁽²⁹⁾とあり、継姉たちは悔しがる

(29) バジール：上掲書、70 ページ。

だけで処罰されない。「サンドリヨン」ではサンドリヨンと継姉たちは和解する。「二人はサンドリオンの足もとに身を投げ出し、それまでサンドリヨンが耐えてきた意地悪な振舞いのすべてを詫びます。サンドリヨンは姉たちを立ちあがらせると、キスをして、喜んで許しますとも、どうかいつまでもわたしを好きでいてください、と言いました。王子は、これまでに増して美しいと思い、それからいく日も経たぬうちに結婚しました。サンドリヨンは、美しいばかりでなく、優しい心の持ち主ですから、二人の姉を宮廷に住ませると、早速その日のうちに、宮廷の二人の大貴族と結婚させました。」⁽³⁰⁾ 「サンドリヨン」の継姉たちは改悛し、サンドリヨンは謝罪を受け入れた上で、継姉たちの結婚を世話する。継姉たちは態度を改めることでサンドリオンの幸運にあやかった。他方、「灰かぶり」の継姉たちは態度を改めようとも罰せられる。彼女たちは自らの誤った判断により足を不自由にただけでなく、第二版以降ではさらに眼球除去という残酷な罰を受けるのだ。ヤーコプ・グリムが『ドイツ法』で述べることには、ゲルマン民族の刑罰において身体の切断刑は死刑よりも軽く、片方の眼球の除去は鼻削ぎより軽い刑であり、しばしば両方の眼球が除去された⁽³¹⁾。野口氏は「罪を犯した者は、その罪を犯すときに使った部位が除去されれば、悪が退治されると信じられていた」⁽³²⁾ と述べ、継姉たちの罪は目に発していると示唆する。また、キャッシュダンは継姉たちの罪は「羨望」に他ならず、フランス語の「羨望 (envie)」という語がラテン語の「見る (videre)」に由来することから、継姉たちは視力を失うことにより羨望の能力を奪わ

(30) 新倉朗子訳『完訳ペロ－童話集』岩波文庫、2009、222 ページ。

(31) Vgl. Grimm: Deutsche Rechtsaltertümer. S. 707.

(32) 野口：上掲論文、9 ページ。

れたのだと考える⁽³³⁾。継姉たちがモノや人を目で見なければ、羨望は生じず、意地悪な振る舞いに及ぶことはない。

最後に、継姉たちに罰を下したのが灰かぶりではなく、鳩である点に注目しよう。灰かぶりは靴合わせの場面以降、呪文を唱えることも、木や鳩たちに援助を求めることもない。それは金の靴を取りあげられ、呪力を失ったためである。王子の手から金の靴が渡されて婚約が成立し、彼女は結婚を機に父親の圏域から王子の圏域へ生活の場を移す。彼女が父親の家の竈の辺りで力を蓄えたのは次のステージに移行するためであり、結婚して呪力を失った灰かぶりに代わって、鳩すなわち亡き母親の魂の化身が継姉たちに復讐するのだ。

6 おわりに

シンデレラ物語というと、救い手を待望して苦境を耐え忍ぶ他力本願の主人公が思い浮かぶが、グリム童話の灰かぶりは自力解決型である。グリム兄弟は初版にペローの「サンドリヨン」の影響の強い物語を採用したが、第二版以降、ヨーロッパの類話を念頭におき、ゲルマン民族の慣習に照らして、独自の灰かぶり像を作っていく。ヨーロッパのシンデレラ物語の多くは結婚後のことも語っており、世界各地のシンデレラたちは姑に苛められ、夫の無理解に苦しみ、子育てに苦勞し、次々と苦難に見舞われるが、それでも強く生きていく。こう考えると、シンデレラが結婚前の娘を指すことは明らかだ

(33) シェルダン・キャッシュダン (田口孝夫訳) 『おとぎ話と魔女－隠された意味』法政大学出版局、2003、140 ページ参照。ただし、ドイツ語の「羨望 (Neid)」の語源を遡っても「見る (videre)」の意味はないが、グリム兄弟がフランス語やラテン語に通じていたことは確かであり、キャッシュダンの見解は妥当であろう。

ろう。グリム兄弟が類話におけるその後の展開も念頭に置いたうえで、灰かぶりが結婚するまでを一つの物語にしたのは、灰かぶりの呪力が発揮され、結婚を機に失われる様を効果的に描くためではないだろうか。

本稿では、初版と第二版を比較し、亡き母親が鳩を介して娘を援助する図式が、灰かぶりが竈の周囲で過ごして呪術を身につける図式に変化したとみなした。ヨーロッパ文化において竈の火は家の存続と同一視され、竈周辺が先祖崇拝の場であったことを踏まえると、「灰かぶり」では亡き母親の墓と竈は別の場所に置かれているものの、灰かぶりが先祖崇拝を欠かさないおかげで子孫繁栄の未来を引き寄せたと言える。母親が死後も娘を気遣うこと、娘が亡き母親を弔うことは共に、一族繁栄の願いの現れであり、その実現には、死者から生者への援助や呪術が必要とされる。グリム兄弟は初版（1812）を第二版（1819）へ改稿する際に、灰かぶりが亡き母親の援助を受けて幸せをつかむ図式を、灰かぶり自身が自然界の事物を駆使して現実を生きのびる図式に置き換えた。事実、第二版以降の灰かぶりは、鳩を手なづけて自分の希望を叶えており、木から衣服を入手・返却する様は衣服の自動貸し出し装置を操作するようであり、灰かぶりが駆使する術は技術と言い換えられよう。グリム兄弟が改稿した時期は、ナポレオン戦争を経たヨーロッパが新たな時代を迎えるかもしれないとの期待に満ちていた。灰かぶりが哀れな女の子から、頭を働かせて道を切り開く逞しい女性へと変身したのは、グリム兄弟が新しい時代に寄せた期待に連動するのであろう。